段玉裁の学問

——説文解字注の言部を読んで——

近藤光男

はじめに

清朝経学、一般には清朝考証学とよばれるこの時代の学問についての、今日最も望ましい認識として、私なりの見通しを次のごとく掲げて、はじめにこの時代の学術史における段玉裁の位置を示すこととする。

呉郡恵氏の学　恵棟

嘉定銭氏の学　銭大昕

戴段二王の学　戴震　段玉裁　王念孫

清朝における古典研究、清朝経学にあって、呉郡恵氏の学は求古の学であったのに対し、戴段二王の学は求是の学であった。実事求是の語が、もっぱらいわゆる清朝考証学の心象を造りあげて来たが、それは呉郡恵氏の学をいうにはふさわしいかもしれないが、少くとも戴段二王の学をいうには、「學を好んで深く思ひ、心にその意を知る」、すなわち司馬遷がその史記のはじめに乏しい史料を以て書かざるを得なかった五帝本紀の読者としては、そういう人に期待するといった、その「好學深思、心知其意」の語こそ、もっともよく当ると私は考える。(1) 言いかえれば、許鄭を祀るのが清朝漢学の基本姿勢として衆知のこととなっているが、戴段の学は実に許鄭を超えるものであったし、また許鄭を超えること

によって許鄭を不朽ならしめるものであった。むしろ不朽ならしめることを意識して超えることをあえてしたものでさえあった。そこにこそいわゆる清朝考証学の真随が見出されねばならない、と私は考える。しかもこの点について、今日なお一般の認識を喚起する必要を覚える。

ところで、段玉裁の学問を考えるには、まず古文尚書撰異三十三巻、そして毛詩故訓伝定本小箋三十巻、周礼漢読考六巻、儀礼漢読考一巻、また経韵楼集十二巻がある。しかし本稿はもっぱら説文解字注の言部を読んで気づいた一つの事象について報告する。ただそれは、これまで私が戴震の学問についてその性格を考え、その考工記図・屈原賦注・続天文略などの著述、またその周髀北極璿璣四遊解・王内翰鳳喈に与ふる書などの論文、についていくらか明らかにして来た点、すなわちたとえば戴震は、二次的な経、経に亜ぐ古典をとりあげ、これに注することによってこれを経にまで高めようとする、あるいは時として古典の事実を超えたところにある真実をとらえてしまいさえする、少くともつねに漢儒を超えて真実を追求するのが戴学であった、といった点が、実にまたその弟子段玉裁の学問に見られる、ということを明らかにするに足るかと思う。そこで今ただちに説文言部の段注に入るまえに、まず段玉裁の、その師に似る、著作についての抱負と読める文を見ておきたい。

一

段玉裁は説文解字読の筆を執るに先だって六書音韵表五巻を完成していた。乾隆四十年（一七七五）四十一歳。そして注の執筆にかかる翌四十一年にかけての一両年の間、六書音韵表一部を浄書して戴震に送り序を請うこと、またいま戴東原集巻四に収める「段玉裁に答えて韻を論ずるの書」は、于氏の家で失われて段氏の手もとには届かなかったいきさつなどあるのは、今は一切省くとして、ここに指摘しておきたいのは、六書音韵表こそ、これを説文解字注に附刻す

ることによって、はじめて許叔重の書をして完からしめるものであると、段氏が考えていた事実が見られることである。

それは実に開宗明義、「一」の説解のもとに附された段注に見える。段氏はいう、(2)

私は六書音韻表を作り、古韻は十七部に分かれることを明らかにした。それは、倉頡が文字を作った太古から、唐虞三代、秦漢とくだって、許叔重が説文解字を著わして「某の聲」といい、「読むこと某の若し」ということになるまでのあいだ、実に条理一貫していささかのみだれもないものなのである。そこで私は、徐鉉の反切を用いて字音を示しはするが、さらにどの字にも十七部について古音は第何部かを記すことにする。

玉裁作六書音均表、識古韻凡十七部、自倉頡造字時、至唐虞三代秦漢、以及許叔重造説文、曰某聲、曰讀若某者、皆條理合一不紊、故既用徐鉉切音矣、而又某字志之、曰古音第幾部、

そしてまたこの書物の読者が、六書音韻といった書物を見たこともなくて、私のいう古音第何部が、なにをいっているのかわからないことになってはとの顧慮からして、説文十五篇のあとに六書音韻表五篇を附することによって、字形の書と字音の書とが表裏をなすようにし、読者がこれを手がかりに研究すれば、いにしえの字形、字音、字義について関連づけての追求ができるようにしておく次第である。

又恐學者未見六書音均之書、不知其所謂、乃於説文十五篇之後、附六書音均表五篇、俾形聲相表裏、因耑推究、於古形古音古義、可互求焉、

一見、読者の便宜を図る周到な用意を語るのみ、と読めよう。しかし私は「形聲をして相表裏せ俾め」の句に注意したい。その状態は説文に六書音均表を附することによって生れるとしていることは明らかである。それならば、説文は字形の書、六書音均表は字音の書と考えているのではないか。私の訳文はすでにそうとして訳している。果してそうなら

ば、許叔重の名著に自分の著作を併せることによって、古代における文字の形音義を一貫して求めうる書物が生まれる、六書音均表こそは、許叔重の書をしてはじめて全き説文解字たらしめるもの、と考えていることになる。

しかし段玉裁自身、この文のはじめにも説文に字音をいうことを述べていた。果して説文を字形の書とみてよいであろうか。それは「一」につづく「元始也、从一兀聲」に附された段注によって知ることができる。

およそ文字には字義・字形・字音がある。爾雅以下は字義の書である。声類以下は字音の書である。説文は字形の書である。

かく明言したうえ、つづいてさらにそれを論証する。

なぜなら、およそ説文では、一字を篆文で掲げ、まずその字義について訓詁を与える。「元、始也」の「始也」、「天、顚也」の「顚也」などがそれ。次にその字形を説明する。「从某、某聲」などがそれ。次にその字音を示す。「某聲」及び「讀若某」などがそれ。この三段階にわたる解説が合体して、一字の篆文が文字として完成するしくみになっている。さればこそ字形の書といえるのである。

凡篆一字、先訓其義、若始也顚也、是、次釋其形、若从某某聲、是、次釋其音、若某聲及讀若某、是、合三者以完一篆、故曰形書也、

つまり、説文の説解が字音についても語ると見做しうるところから、これだけの論証を要したのであろうが、ここに段氏が説文を字形の書ととらえていた明証がある。してみれば、「形聲をして相表裏せ俾(し)め」の一句に段氏の抱負を読みとろうとする私の考えも、充分に成り立つであろう。

以上は戴震の弟子、段玉裁の著作の態度乃至その抱負において、実にその師の学に相似るものがあることをはじめに示して置きたいと思ってのいささかの考覈である。以下、本稿の本旨に入る。

二

説文解字巻三上、言部第五十六は、まず「言」字の篆文を掲げて「直言を言と曰ひ、論難を語と曰ふ」の説解を示し「口に从ふ辛の聲」とする。段氏はこれに注して、詩の毛伝、周礼鄭注、礼記鄭注として見える三つの古訓のうち、毛伝はまったくこの説解と同文であり、鄭注二つも表現は異るものの、主旨においてかわりないことをいう。

大雅の毛伝に「直言を言と曰ひ、論難を語と曰ふ」と。ただこの論の字を正義では荅にしている。また鄭玄は大司楽に注して「端を發するを言と曰ひ、荅難するを語と曰ふ」といい、雑記に注して「言とは己の事を言ふ。人の爲に說くを語と爲す」という。この三つの注はおおむね同じことをいっている。ところでこのあと説文に「語は論なり」「論は議なり」「議は語なり」とあるから、詩の毛伝は定本・集注に従わねばならぬ。

毛伝の訓詁は大雅公劉の篇の「時に于いて言ふべきを言ひ、時に于いて語るべきを語る」の句に見える。ただ正義が「〈荅難曰語〉は二人相對するを謂ふ」というのからすると、その見た毛伝は「論難」でなく「荅難」であり、それは続いて「定本・集註 皆な〈論難曰語〉と云ふ」というのによって明らかなのであるが、段氏は説文が 語＝論＝議＝語となる説解を組むのによって、毛伝も「論難」をとろうというもののようである。すなわち許慎の説解は完全に毛伝に一致する。次に周礼春官大司楽の鄭注は、「樂語を以て國子に興道・諷誦・言語を教ふ」に注したもの、「荅難」は実は「荅述」に作る。賈疏に引くも「荅述」。礼記は雑記下の「三年の喪には、言ひて語らず、對へて問はず」の鄭注であるが、「己の事を言ふ」とは、大夫士の場合、口を利くことによってはじめて側づきの者がとりはからう（喪服四制の文）のであるからと、正義はいう。すると三注を通じて、一方的な発言が言、相手に何か言えば反応があるのを意識してするのが語、との対比と理解してよいであろう。段注はこのあと、「言、我也」の訓詁があることについての配慮がある

が、今は省く。

では「語」そのものについてはどうか。説文は「語、論也」とのみいい、「从言、吾聲」とする。段氏は注して、「語は論なり」とは毛鄭の説そのものであるといい、次いで「語とは禦である」というが、それは語（魚挙の切、五部）と禦（本字は敔、説文三篇下攴部に「敔は禁也、…攴に从ふ、吾の聲」と見える。魚挙の切、五部）とは上古音を同じくし、語の音には、ふせぐ、とどめる、かこう、などの意をふくむことを注意するものなのであろう。以下に段氏が毛鄭の説を分かち、一人でするのと相手あってするのとの区別をするのは何に拠るのか、私には考え及ばない。

此れ即ち毛鄭の説なり。語なる者は禦なり。毛の説の如くならば、一人是非を辯論する、之を語と謂ふ。鄭の説の如くならば、人と相荅問辯難する、之を語と謂ふ。

ただここで段氏が、おおむねの場合と異って「論也」の説解についてまったくふれないのは、後に述べるところによって意識してのことと分かる。ところで次にその「論、議也」に至るまでに、段氏の説の顕著なもの、またその述作の態度として注目すべき点について見ておきたい。「讎」字と「讀」字との下に見える段注である。

段氏は「讎、猶應也」を論じていう。およそ漢人が作った注で「A猶B」という場合はみな意味に隔りがありながら、それが通用することをいうのであって、許慎が説文解字を著す場合とはわけがちがう。従って許慎はいつもまっすぐに字義を説き、「猶（なほ…のごとし）」とはめったにいわない。ここに猶の字があるのは、讎の字の原義が應（当る）であることを知らぬ浅学の輩が、讎といえば、あだの意（怨詞）としか知らぬため、讎と應とは直接には結びつかぬと考えて、勝手に猶の字を加えたものにすぎない、と。段氏はここで、かくも熱心に猶の字のあるべからざることを論証しながら、猶の字を段注本の説解にも存して刪らないでいることに注意しておきたい。

これに異り、このあと「讀」の字において、段注本説文が「讀、籀書也（讀は書を籀するなり）」とするのは、あら

ゆる本が「誦書也（書を誦するなり）」としているにもかかわらず、段氏はそれを浅人の改めたものとして、断乎として彼が信ずる本来の説文の原型に復したものなのである。

籀は各本 誦に作る。此れ 浅人 改むるなり。今正す。

と。それは竹部に「籀、讀書也」とあること、そして讀（徒谷の切、三部）と 籀（直又の切、三部）とは 畳韻であり、互訓であるはずとの動かぬ証拠をつかんでのことであることが、この文につづく段注によって読みとれる。その点、さきの「讎、猶應也」の「猶」を排除するには、これほどまでの依拠を説文自体の中に得ない。それこそが「浅人の之を加ふるのみ」としながらも、なお説解を正すことをしなかった理由であるにちがいない。段注が武断の譏りを受けていることを知らぬではないが、むしろ今この一例を以てしても、説解すなわち説文の本文についての改変には、段氏がいかに慎重であるかを知ることができよう。これに類する例をさらに挙げることは、さほど困難でない。

ところで段氏が「讀とは書を籀するなり」でなければならないとするのには、実に読書そのもののありかたについての、段氏の見識がうかがえる。「書を籀す」とは、文字すなわち言語に即して、著者すなわち話し手の心の内奥にたち入って、どこまでも奥深いところからその意を引き出すことなのである。

其の義蘊を抽繹して無窮に至る、是を之れ讀と謂ふ。

もとより諷誦するのを読といっている例も、礼記や左伝にある。諷誦も読といってよいけれども、読の字義が諷誦だけであってよいはずはない。諷誦はただ声を出して背文（暗誦）するだけ（大司楽の鄭注）、読こそは字義の包摂する内奥を抽き出すものなのである。元来「籀書也」とあった説解が浅人の手によって「誦書也」に改められてしまってより、〝書を読む〟人がなくなってしまった。読書を暗誦と心得るようになっては、学問の分かる人がいなくなる。

諷誦は止だ其の文辭を得るのみ、讀は乃ち其の義蘊を得るなり。「誦書」を以て「籀書」を改めし自りして、書を

讀む者は尠し矣。

というのである。これは段氏得意の創見であった。竹部の「籀、讀書也」にはもとより、十五卷上 叙の「學僮十七已上、始試、諷籀書九千字、乃得爲史」に注しても、みな同様の説を展開している。事実、およそ説文解字注の一書を通じて、ここは注目されねばならない箇所の一つであろう。吉川幸次郎『読書の学』(昭和五〇年、筑摩書房) に指摘がある。私はここに段氏の論証のかたちを詳説する紙幅を持たないのを心残りとする。本稿は「語は論なり」に次ぐ「論は議なり」についての段氏の見解をたどる大筋に返さねばならない。

三

「論、議也、从言侖聲」に注するに至って、段氏はついに許慎がこれを形声とする考えを修正して、会意であるとする。少くとも声符は意符でもあるとする。

論の字は、侖が言と組合わされる意符のはたらきをしている。亼部に「侖は思也」、龠部に「侖は理也」とあるが、これは二つ別の意味があるというわけではない。「侖は思なり」の思は、玉部の「鰓理 外より以て中を知る可し」の鰓であって、詩の大雅靈臺の「於 鼓鍾を論じ」に毛亨は「論は思なり」という。これこそまさしく許慎が依拠する古訓である。詩の「於論」の論こそ侖の字の仮借なのである。

およそ言語が、その理に沿い、その宜をえている状態、それを論というのである（凡言語循其理、得其宜、謂之論）。さればこそ孔門師弟子の言語の総録を『論語』という。梁の皇侃が当時の俗説によって、去声の場合と平声の場合とに分けて、論の字に異った訓解を与えているのは、孔子の当時、論の字になんら異った意味はなく、平声去声の別もなかったことに思い及ばないでいるのである。

礼記王制の「凡そ五刑を制するには、必ず天論に卽す」、周易の「君子以て經論す」、中庸の「天下の大經を經論す」は、みな倫あり、すなわち秩序があり、脊あり、すなわち統一がある言語を、論といっている実例である。許慎が「論は議なり」「議は語なり」というのは、結構とはいいかねる（許云、論者議也、議者語也、似未盡）。「未だ盡さざるに似たり」は、もとより「盡美矣、未盡善也」を意識する。まだ善を尽さないのである。かく「凡そ言語の其の理に循ひ、其の宜しきを得る、之を論と謂ふ」、すなわち論とは道理に外れることなく、調和を保った言語をいう、とする段玉裁は、許慎の「言に从ふ侖の聲」に注して、「言と侖とに从ふ、侖は亦た聲」とすべきものという。ちなみに「盧昆の切、十三部」。

段氏が引く皇侃の説とは、論語義疏巻第一の題下に見えるそれを指すであろうが、ここに六朝の当時すでに論字の本義が忘れられていたことをいう資料として使う書物は、わが足利学校から出て四庫全書に著録され、鮑廷博が知不足斎叢書に刊入してより、当時まだ多くの年月は経ていない本である。しかも当時まだ彼の土の学界の一部には、〝足利の贋鼎〟と、この書に疑いの目を向けるむきもあったこと、江藩が国朝漢学師承記に、おのが師余蕭客の著、古経解鉤沈を称誉するあまりながらも、もち出すことば[3]で知ることを思えば、ここにも段氏の学問を考えるに足る一つの事実がある。阮元のために十三経注疏校勘記を手訂しても、また古文尚書撰異にも、七経孟子考文を用いる段氏であるが。

なお玉部の「玉」字の説解である「鰓理、自外可以知中」の「鰓」は、説文四篇下角部「鰓、角中骨也」の注に、段氏は鰓の引伸義として「凡そ物の文理なり」といい、「从角思聲」に注して「人部に曰く、〈侖、思也〉と、龠部に曰く〈侖、理也〉と。是れ思は卽ち理なり。此に〈思の聲〉と云ふは、會意を包む。蘇來の切、一部」といっている。また「理」について段氏が、玉部「理、治玉也」に、その師戴震の孟子字義疏証の説を引いて、「凡そ天下の一事一物、必ずその情を推して憾無きに至り、而る後に卽ち安らかなり。是を之れ天理と謂ひ、是を之れ善治と謂ふ」というについ

ては、別に詳考を要する。もっともそれは理の引伸義であり、ここの理はむしろその原義、段氏がいう「玉はきわめて堅いものではあるが、これを〝治め〟てその〝�理〟を得て器物につくりあげることは困難ではない、そういう動作を理という（玉雖至堅、而治之得其腠理、以成器不難、謂之理）」によって読んでおいてよいであろう。腠理とは玉のすじめなのである。

四

ところで説文は「論、議也」につづいて「議、語也」を置く。そしてこの「議、語也」の段注に至って、最も注目されるべき段氏の発言を見るのである。

上文に「論難を語と曰ふ」といい、また「語は論なり」という。つまり許慎によれば、論・議・語の三字はみな、相手にむかってものをいうことを意味することばであることになる。私の考えでは、この許慎の説は結構とはいいがたい。議は誼である。誼とは〝人の宜しくする所〟である。言語がその宜しきを得るのを議という。詩に「出入し風議す」といい、孟子に「處士横議し」というに至って、天下は乱れに乱れてしまったのだ。

上文云、論難曰語、又云、語論也、是論議語三字、爲與人言之稱、按許説未盡、議者誼也、誼者人所宜也、言得其宜、之謂議、至於詩言出入風議、孟子言處士横議、而天下亂矣、

そしてここも「从言義聲」に「當に〈从言義、義亦聲〉と云ふべし」と注する。「宜寄切、古音在十七部」。段氏が、誼とは「人所宜也」とするのは、このあと許慎が誼に施す説解の文そのままである。「誼、人所宜也」に段氏は注して、いわゆる古今字の定義を記すが、ここに必要なのは、周時代に誼と書き、漢時代に義と書いたのが、仁義の義を意味する義の字であるとしていること、「義者宜也」の古訓を想起すべきことであろう。また「言得其宜、之謂議」は、「之謂」

といって「謂之」とはいっていない。これも「謂之」「之謂」に別あることを発見した師説[4]を段氏が知らぬはずはない。「言其の宜しきを得るを、之れ議と謂ふ」であり、「議なるものは言其の宜しきを得るの謂なり」なのである。そうしたかたちでの戴学との関係についての詳考は、ささの理の字義についてと同じく、本稿では姑く措くこととする。

最も注目すべき段氏の発言、と私が考えるのは、「至於詩言…孟子言…」以下である。発言はやや唐突の感もあって読みにくく、果して私の訳文は段氏の意を正確にとらえているかどうか不安は残すとして、まず詩は小雅北山の篇、大夫が幽王を刺る詩、「或は出入し風議し、或は事として爲さざるは靡し」、鄭箋に「風は猶ほ放（ほしいまま）のごときなり」、勝手ほうだい無責任な議論をするということか。また孟子は、「聖王作らず、諸侯放恣にして、處士横議し、楊朱・墨翟の言、天下に盈つ」のくだり。滕文公下。ここで楊氏の為我、墨子の兼愛の説が、父を無みし君を無みし、獣を率いて人を食ましめ、やがては人が人を食うまでの惨状に至るものとして、その恐るべきを極言する孟子が、「先聖の道を閑り、楊墨を距ぎ、淫辭を放ち、邪説の者作ることを得ざらしむ」ることこそわがつとめとし、「聖人復た起こるとも、吾が言を易へじ」とまでの信念を披瀝する衆知の箇所である。段玉裁がここで「而天下亂矣」とむすぶこの短い文の流れは、ぜひともこの背景を想起して読まれねばならないであろう。獣を率いて人を食ましめる、人が人を食うに至っては、それは天下乱るどころではない、それこそ人間の危機でなくてなんであろう。ひとたび言語の本質についての理解を誤れば、人間の危機を招きかねない。そうした段玉裁の意識がここに図らずも吐露されていると読むのは、読みすぎの譏りを招くであろうか。

およそ言語は意志伝達の手段としてあるのは当然としても、かの戦国策に活躍する人物がもてあそぶそれの如く[5]、とかく論難、説得をその本質とするかに見える。許慎また然るか。「論は議なり」「議は語なり」「語は論なり」と、どこまでも「論難を語と曰ふ」で言語現象をとらえていては、たとえそれが毛鄭の説と一致するものであれ、〃未だ善を尽

さず〃ではすまない、まかりまちがえば人間の危機を招く。言部のはじめから段注をたどってここに至るとき、そのかたちはあくまでも逐字的に施された注そのものであるが、そうしたかたちの端正さの奥に、その静謐を破るかくも激しい感情が秘められている、と私には思えてならない。少くとも段氏は、許慎の未だ尽さざる所を、他ならぬ説文自体の中から、「命」「義」の字義を発掘して、言語の本質に秩序（命）と調和（義）の存在を確認している。

五

段玉裁が説文解字注の筆を執り始めたのは乾隆四十一年（一七七六）、四十二歳、三十巻を完成したのは嘉慶十二年（一八〇七）、七十三歳、ともに第十五巻下に注してみずからいうところにもとづくが、実に三十年にあまる畢生の著述である。もとより経の逐字的な訓解に生涯をかけた清儒について、その努力の傾注においてこれに匹適するものを挙げることは困難ではない。ただ段玉裁の場合、ここに示しえたのはまだわずかに一事象にすぎないのではあるが、その注は決してもっぱら許慎の説解に即して考証疏通するにとどまるものではないこと、毛鄭すなわち漢儒の古訓を超えて、言語の本質に迫ろうとする意欲が見られる、ということまでは充分に許されるであろう。

段玉裁の経韵楼集巻七には「東原先生札冊跋」を収める。嘉慶十九年十二月二日の記年があり、時に八十歳。その師東原先生、戴震から送られた手紙十四通を新たに装訂しての跋なのであるが、

戴先生が「字義、制度、名物についての研究を措いて、六経の言語に通ずるてだてはない」とおっしゃる一通、また「天理とは人欲にほかならぬことを知らないと、〃意見〃によって誤った〃理〃という概念をたてて、民衆に禍いをもたらします。私の生涯の著述の中で、最も大切なものは、孟子字義疏証です。これは人心を正すについての要（かなめ）です」といわれる一通。この二通のお手紙は、聖人の道がここに示されている。恐らく私を、このことを告げて

おいて、これを後世に伝えさせるに足るもの、とお考えになってのことであったろう。

「此の二札なる者は、聖人の道 是(ここ)に在り。殆んど玉裁を以て 此(これ)を語りて之を伝ふべし と為せるなり」、学問研究の目的と方法、その根幹を示された、それも自分のことをそれを語るにふみわしい弟子とお認めくださってのことと、師の没後三十八年、説文解字注の筆を擱いてからは八年にして、涙を新たにする段玉裁の姿がここに在る。戴震が意見というのは独断、臆見、の意。戴震の手札は安徽叢書の戴東原先生全集の巻首に十一通が景印されている。段氏がいう二通はその第九・第十札を指すかと思う。

説文解字注、並びに六書音均表は、まさに清朝小学の歴史に不朽の業績である。段玉裁にそれを成さしめたのは、その師戴震の学問乃至その方法をこの書に施すことを試みようとの、賢明な選択が始めに働いたからではないか。しかし段氏がもしも、小学をたんなる技術の作業のごとく認識していたとすれば、とうてい高邁な識見は生まれるべくもなかった。一篇上「下底也」の注に、転注の意を解説してのしめくくりのことばは、「好學深思の者有りて、當に能く心に其の意を知るべきなり」である。これは必ずしも許叔重の六書の意についてのみ言うのではなかろう。段氏自身の注についてもまた、好学深思の読者があらわれて彼の微意を抽繹してくれることであろう、それに俟つと、ここに司馬遷の故知に倣って言っているごとくにも読める。

段氏畢生の著作、説文解字注の根柢を貫くものは何か。およそ人間の言語は、人間世界に秩序をもたらし、調和を維持するためにこそあるものとの篤信ではないか。果してそうならば、それは戴震が屈原賦注を著すに際し、屈原の心を純の一字でとらえて、その言語もまた至純なりとの信念のもとに注を書いた、また注を書くことによってこれを経と同列に置きうるものとしようとしたことと、すべてすこぶる相似る。すると清朝考証学とよばれるこの時代の学問全般についての認識を修正するに足る事象をここにまた一つ加ええたことになる。〃豈に小学と云はんや〃[6]である。

〔注〕

(1) 「王念孫の学問」(『加賀博士退官記念中国文史哲学論集』、昭和五十四年)、また昭和五十六年第三十回東北中国学会(函館)「実事求是と好学深思」(集刊東洋学第四十六号に要旨)。

(2) 説文「一」部は昭和四十五年に頼惟勤教授指導による説文会の油印本が出ているので、本学会会員には蔵する方が多いことと思う。以下、本稿に掲げる訳読は当時、頼学兄から贈られたそれに負うとともに、試みにあえて異をたてたところも少くない。謹んで批判を俟つ。ただ、これは、かかる高度の専門に属する書物の翻訳のありかたとして、日頃抱く私見を、ここで始めて段注に施してみたものである。それは昭和三十四年「花間集の提要をめぐって」(東京支那学報第五号)が、「総目提要のような文章をいかに国語訳するかという実験」(同論文注16)であってより以来、私にあって一貫している方法のつもりである。

(3) 漢学師承記巻二。戴震が余蕭客のために書いた古経解鉤沈序(戴東原集巻十に見える。私はまだこの書の巻頭におくものを見ない。)に、「この本にはまだ沈んでいないのに鉤(つ)りあげたものもある」と評したのに反論しての言及。

(4) 朝日新聞社中国文明選8『戴震集』一五二ページ参照。

(5) 戦国策謀の士の言論とても、戦国という乱世に処する知恵として、危急に陥ちた人間にとって、危急を脱する英知を生むにつながるものであった。劉向の序にいうそうした意味への解釈に私は与(くみ)したい。集英社漢文大系23『戦国策』上、近藤解説「史伝か文学か」参照。

(6) 銭大昕が、阮元の経籍纂詁のために書いた序の、むすびのことば、「小學云乎哉」による。